藝大通信

13
SEPTEMBER
2006

TOKYO
GEIDAI
東京芸大広報誌

特集　千住キャンパス開設

音楽の未来 ー地域と文化、研究と教育をめぐって
大角欣矢　佐野靖　畑瞬一郎　熊倉純子

教員は語る　第五回　佐藤雅彦×山下薫子

芸大の歩き方　第五回　音楽ホール

堀越 謙三（ほりこし・けんぞう）

1945年生まれ。2005年4月から東京芸術大学映像研究科教授。1977年にヴェンダースらニュー・ジャーマン・シネマを公開、83年にミニシアター「ユーロスペース」設立以来、張芸謀、キアロスタミらを配給。92年から海外作品では『スモーク』『POLAX』など、日本映画では『TOKYO EYES』『どこまでもいこう』などを製作。プロデュースした作品でベルリン映画祭銀熊賞、ヴェネチア映画祭銀獅子賞や文化庁優秀映画大賞など輝かしい成果を収めた。97年にNPO法人「映画美学校」を設立、映画スタッフの教育、新人監督による映画製作を進め、日本映画のための人材養成に貢献し、さらに2005年4月開設の東京芸術大学映像研究科の立ち上げに尽力するなどの功績が認められ、同年7月、第23回川喜多賞を受賞した。
（撮影場所：表紙・横浜校地馬車道校舎大視聴覚室　上・同校舎入口）

第13号目次

3....11 特集
千住キャンパス開設
［座談会］
音楽の未来―地域と文化、研究と教育をめぐって
大角欣矢　佐野靖　畑瞬一郎　熊倉純子
千住キャンパスの概要　亀川徹
キャンパス開設記念イベント情報／千住散策

12....13 芸大の歩き方
上野の杜のキャンパスガイド
第5回　音楽ホール　杉本和寛

14....15 上野の杜の波瀾万丈
第3回　美校の経営戦略・依嘱製作事業
吉田千鶴子

16....17 クラブ・サークル訪問
第4回　映像美術部　蛯沢あゆみ

18....21 教員は語る　第5回
芸大への期待・抱負・提言
佐藤雅彦×山下薫子

22....23 NEWS2006.3～2006.8
編集後記

藝大通信

No.13
TOKYO GEIDAI
東京芸術大学広報誌

編集発行
東京芸術大学藝大通信編集部

編集委員
長濱雅彦（美術学部デザイン科助教授・編集長）
布施英利（美術学部助教授美術解剖学研究室）
安藤政輝（音楽学部邦楽科教授）
杉本和寛（音楽学部助教授音楽文芸研究室）

アートディレクター
蓮見智幸（美術学部デザイン科助教授）

制作
株式会社　平凡社

発行日
平成18年9月10日

お問い合わせ先
東京芸術大学総務課企画評価・広報室
〒110－8714　東京都台東区上野公園12－8
電話　050－5525－2027
FAX　050－5525－2479
e-mail toiawase@ml.geidai.ac.jp
URL http://www.geidai.ac.jp

特集

千住キャンパス開設

音楽の未来——地域と文化、研究と教育をめぐって

東京足立区にオープンした千住（せんじゅ）キャンパスには、音楽学部音楽環境創造科が茨城県取手キャンパスから移転した。また大学院では、音楽研究科の音楽学専攻を拡大再編した音楽文化学専攻が、千住キャンパスを活動拠点のひとつと位置づけて研究活動を行うことになっている。千住キャンパスは、「音楽・文化・学」の新たな動向に対応するとともに、地域とのかかわりを重視した音楽研究・音楽教育の新たな拠点として、学内からも学外からも大きな期待を寄せられている。

［座談会］

大角欣矢
助教授—音楽学部楽理科

佐野靖
教授—大学院音楽研究科音楽文化学（音楽教育）

畑瞬一郎
教授—大学院音楽研究科音楽文化学（応用音楽学）

熊倉純子
助教授—音楽学部音楽環境創造科

音楽学の現在と課題

畑　ここ数年芸大は大きく変化しつつあります。音楽学部においても音楽環境創造科の設置、また大学院の再編にともなう音楽文化学専攻の開設といった新しい動きがあります。そのような流れのなかで、この秋、足立区の協力を得て千住キャンパスが作られることになりました。これらは、大きな傾向として音楽学という伝統的な学問の周辺領域が拡大し、充実してきていることとパラレルな関係にあると考えることもできるでしょう。そこでまずはじめに、二十世紀末から二十一世紀にかけて、音楽学の視野や射程が広がってきているということに関して大角先生の考えを聞かせていただき、続けて音楽教育の佐野先生、音楽環境創造科の熊倉先生のお二人から、千住キャンパスと教育研究活動の動向について、ご意見をうかがいたいと思います。

大角　近代的な音楽学はヨーロッパ、なかでもドイツを中心に十九世紀に成立した学問です。それから一世紀半ないし二世紀が経過した今、その内容は明らかに変質してきています。

　従来、音楽学研究の中心を占めてきたのは楽譜の分析で、音楽作品を理解するために、楽譜を分析してその構造を明らかにするということに、二十世紀半ばぐらいまで大きなエネルギーを費やしてきました。そういう積み重ねの上に現在の音楽学があるわけですけれども、二十世紀が終わりに近づくにつれ、そういうやり方では音楽をめぐる理解には限度があるのではないかという反省がさまざまな場面で出てきたわけです。

　つまり、楽譜を主な媒介として伝えられる音楽というのは、地球上のごく狭い範囲の、それも狭い時代のある特定の社会層を中心にやりとりされる音楽であって、その外側には非常に広大な、楽譜を必ずしも必要としない音楽の領域が広がっているという認識が強まってきました。また、たとえ楽譜に表せる音楽であっても、楽譜の構造を分析するだけでは音楽がわかったことにならないのではないかという反省があり、その人が置かれている社会的な状況や、身体の音と関わる側面がどのように形成されてきたか、音の響きがその人の属する文化的なコンテクストのなかでどういう意味を生産しつつあるかといったダイナミックな音と人間の向き合いに、もっと目を向けなければいけないのではないかと今考えられています。

　こういう時代に芸大大学院に音楽文化学専攻ができて、複数の研究分野が緊密に連携していこうという動きが生まれていることは、音楽学にとってもまさに願ってもない方向性ではないかと思っています。音楽学の新しい展開にとっても非常にポジティブなチャンスが、今与えられているのではないかと期待しています。

佐野　人間と音楽のかかわりを教育的な視点から研究したり実践したりすることを、広く音楽教育と捉えています。音楽教育や音楽教育学といった用語は、いわゆる学校音楽を意味する「音楽科教育」よりももっと広く、根本的には人間にとって音楽がどういう意味を持つかという問いを内包しており、そういう面では音楽学とも共通の根っこを持つものだと思っています。芸大には、学部ではなく、大学院にしか音楽教育の講座はないのですけれども、学生たちの研究や実践の対象は、学校の音楽に限りません。むしろ音楽の専門教育から幼児の教育、成人あるいはシルバー世代の教育、生涯学習を視野に入れた社会教育的な側面、それから音楽療法も含めた福祉的な面でのアプローチなど、いろいろな研究・実践の対象を持っています。

　大学院レベルでの研究の可能性という点では、今回足立区というフィールドを得て、教育現場と協力しつつ地に足のついた実践研究ができるのではないかと期待しています。千住キャンパスが、足立区を中心とした社会教育の発信拠点として、また音楽文化学としての音楽教育研究のフィールドになる可能性があると思っています。

　もうひとつアウトリーチ的な活動として、演奏系の学生及び卒業生たちが演奏活動や創作活動を通して、足立区の教育機関や地域と交流することも広い意味での音楽教育であると考えています。（注）アウトリーチ（Public Outreach）：芸術活動や教育研究を行う組織が一般社会に向けて教育普及・啓発活動などの働きかけを行うこと）

熊倉　音楽環境創造科の教育は多岐にわたっていますが、そのうちのひとつである音響エンジニアリングという部分に関して、これまで取手キャンパスには充実した環境がありませんでした。したがって千住キャンパスに作られる録音スタジオで、さまざまな外部の専門機関と連携をしながら、より高度な実験を行ったりしていくことが、より自在に展開できるようになるという点で大きく期待できるでしょう。

　ただ録音技術者やトーンマイスターがいてもそれだけでは録音はできません。作品がないといけないし、演奏家がいないといけないし、そういう意味で上野キャンパスで活動している演奏家の皆さん、あるいは曲をつくってくださる方々も千住に来て居場所を持てる

大角 欣矢
（おおすみ・きんや）
助教授――音楽学部楽理科
1960年兵庫県生まれ。83年東京芸術大学音楽学部楽理科卒業、86年同大学院音楽研究科修士課程修了、91年同博士後期課程単位取得満期退学。東京芸術大学音楽学部助手、講師、鳴門教育大学助教授を経て2000年4月から現職。

ことで、拠点として機能できるようになればと思っているところです。（【注】トーンマイスター（Tonmeister）：「音の匠」として録音のあらゆる側面をコントロールする専門家。ドイツでは国家資格として高く評価されている）

また、学科のもうひとつの柱であるアートマネジメントにおいては、「教室の中だけで勉強していても、料理をつくらずに料理のつくり方だけ勉強しているようなものだ」といわれます。学外に実践の場を持つことはわれわれにとって非常に重要で、これまでも取手市や市民の方々にお世話になり実地で学ばせていただいておりますし、文化振興の計画にもかかわらせていただき非常に勉強になりました。足立区でも千住校地だけではなくて、地域そのものがキャンパスだと考えて何か活動できるのではないかと思っています。

やはり全体を見ないと芸術振興の計画はできないので、特に私の専門分野から言いますと、音楽や芸術の外側の世界が音楽や芸術をどう捉えていて、何を期待しているのかが非常に重要な関心事になってきます。ですから、地域の期待はわれわれにとって責任が重いことではあるのですけれども、きっといい勉強ができるだろうなと思います。

また、これからは演奏家も研究者も、社会全般の流れや、社会が芸術や音楽に何を期待しているのか、どういうふうに位置づけられているのかを、専門家として活動していくうえの教養として学んでおいたほうがいいかなと思っていますので、ぜひわれわれの社会環境に関する授業に、上野キャンパスの学生にも積極的に参加してもらいたいと期待をしています。

佐野 靖
（さの・やすし）
教授――大学院音楽研究科音楽文化学（音楽教育）
1957年徳島県生まれ。81年東京芸術大学音楽学部楽理科卒業、85年同大学院音楽研究科修士課程（音楽教育）修了、86年同博士後期課程中途退学。東京学芸大学助手を経て、88年東京芸術大学音楽学部講師、90年同助教授、2006年4月から現職。同年1月から東京芸術大学音楽学部副学部長。

異質なものが出会い、新しいものが生まれる

畑　おっしゃるように、音楽を中心とした多様な芸術活動を生みだし、育てていくには、それらの土壌となる社会についても考えていかなければならないというのが、二十一世紀に向けた音楽学部の新しい視点であり、これがとても重要であることはあらためて強調しておいてよいでしょう。

その意味で、これまで上野キャンパスで養成してきたいわゆる音楽家が、その素晴らしい演奏を千住キャンパスの専門的なスタジオで高品位な録音作品にしていくという活動が期待されるのはもちろんのこと、社会に関心を向けた千住キャンパスの研究教育の成果やリソースを上野に持ってくることによって、これから音楽家として巣立っていく学生たちが社会的な要素や技術的な要素にも目を向けるようになっていくのが理想ですね。両方の作用があってこそ、お互いにいい刺激を与え合う環境ができるのではないかと思います。

佐野　地域との連携では、今年秋の文化の日を中心に、足立区の子どもたち、あるいは音楽好きの区民たちと芸大生が一緒に演奏したりしながら、交流を深めていけるようなコンサートを企画しています。また学校現場との連携では、部活の合唱やブラスの指導、あるいは鑑賞教室のようなものを提供することができるでしょうし、さらには大学院生を中心に、授業実践に寄与できる方策も探っていきたいと考えています。いずれにせよ、こちらから提供するばかりではなくて、地域や学校と互いに学び合うという、往復運動やコラボレーションを大事にしたいと思います。

すでに足立ジュニア吹奏楽団の皆さんに協力をお願いし、子どもたちの音楽的能力を高める実験的な指導を実施しています。こうした継続的な取り組みから導き出された基礎データをもとに、器楽演奏における音楽の基礎指導はどうあるべきか、また子どもたちの基礎的な音楽能力をどうやって高めるかといったノウハウを、これから体系的にまとめていきたいと思っています。

畑　子どもと大人、伝統と革新、技術と感性など、異質なものが出合うことによって、伝統がさらに鍛えられ、あるいは新しいものが生まれてくる、それこそがいわゆる切磋琢磨というものでしょうが、本質的な創造とは、このような異質な要素が出会う環境から生み出されるものだと思います。

もういちど音楽学に話を戻したいのですが、これまで音楽学というのは、西洋のクラシック音楽、たとえばモーツァルトやベートーヴェンといったイメージで語られてきたと思います。しかし、例えば音楽民族学の領域などでは、必ずしも西洋クラシック音楽で通用する概念だけではカバーできない部分にもすでに目を向けてきていますね。そういった視線をさらに延長していくと、ポピュラー音楽の研究など、研究の裾野は随分広がってきていると思うのです。その意味で、これまでの西洋クラシック音楽研究の知識や前提条件が当たり前とはならないさまざまな領域において新しい知の出会いがあるということは、音楽学にとっても大変刺激的な状況なのであり、そのような広い領域で縦横無尽に考察を行っていく、そして、これまで結びつけられてこなかった要素を結びつけていくことが音楽文化学という新しい枠組みに課せられた仕事なのだと思います。

「橋渡し」という営み

大角　従来の音楽学の世界では、われわれの社会生活からかけ離れたところで、「人類にとって音楽とは何か」といった、すごく高尚な問いを掲げて抽象的な議論を繰り返してきたむきもあります。そういう社会から遊離した研究にもとづいて進んでいくと、どこにいるのかもわからない人類を想定して、「あなたが音楽だと思っているものはまちがっている」とか「あなたの音楽理解はまちがっている」という主張を押しつけることになりかねないわけですね。

　具体的でローカルなコンテクストのなかで、その人たちにとって音楽はどういう役割を果たして、どういう意味を持っているのかと問わなければ、われわれがやっていることは全然社会に還元されていかないのではないでしょうか。アカデミズムの外に出て、あるいはアカデミズムの内と外を往復して、実際に生きて生活しつつ、文化活動に携わっている人たちと一緒に、ともに音楽をつくり、ともに実践しコラボレーションをしていく。まさにそこで生涯教育ということにもわれわれはどんどん携わっていくべきだろうと思います。

　また、ローカルなコンテクストのなかでの研究や文化活動だけではなく、二十一世紀はグローバル化の時代と言われているように、地球のいろいろなところと瞬時につながっているわけです。われわれが音楽学といったときにいつも想定してきた西洋クラシック音楽の伝統的な枠組みから抜け落ちてきた、世界各地の音楽、あるいはポピュラー音楽といったグローバルなコンテクストと、例えば足立区という具体的な地域文化のコンテクストが結びつく一種のアクセスポイント、結節点として、芸大がどういう活動をしていくべきなのかが、今まさに問われているのではないでしょうか。

熊倉　社会と芸術をつないでいくうえで、「橋渡し」という言葉をよく使いますけれども、芸術が領域化されて専門施設のなかに閉じこめられてきた結果、両者の溝は思ったより広がってしまっているのではないでしょうか。すると「橋を渡す」ときに橋桁が一本では無理で何本も必要になってくると思うんですが、音楽環境創造科の研究教育活動は、どちらかと言うと社会の側から音楽を見て一本の橋桁になるということかと思います。でも、それだけですと、非常に産業化されつつある音楽ばかり聴くことになるかもしれません。ですから一方で抽象的で高邁なことを考える橋桁も必要だと思います。その両方があって初めて橋が架かるのではないかと思うんです。

小さな感動の積み重ねから

佐野　全国の教育現場で子どもと音・音楽の出会いをみてきた経験から言えば、たとえ小さなものでも、子どもたちにとってビビッドな感動がとても重要だと思います。そうしたアクチュアルな瞬間的な音・音楽との出会いが大切で、そういうものを積み重ねていきたい。

　また、表現者にとっても、目の前で子どもたちの表情がどう変わるかといった体験、大ホールでは味わえないような生（なま）の交流はかけがえのない貴重なものとなると思うし、新しいフィールドができたところで、そうした場を少しでも広げていければと思っています。

畑　そうですね。音楽には人間の精神の根本的なところに働きかける力があると思います。ところが、これまでは「芸術」という言葉、その崇高な概念を大切にするがゆえ、ややもすれば象牙の塔のようなものとなってしまい、もっと直接にアピールできたであろう仕事をしてこなかったのではないか、という反省の気持ちもどこかにあります。

　芸大のような組織が、ほんとうに地道に、毎日の小さな感動をつくり続けることによって、何か小さな変化が具体的に起こってくるのではないかと期待しています。教育現場などで「音楽ってすごいね。もう一度見直してみよう」ということになっていけば、いずれは国家レベルの文化政策にも十分に反映されていくだろう。十年どころか五十年、百年という期間で考えなければならない話であるかもしれないけれども、そういった小さな具体的な仕事にこれから踏み出していき、いつ始めても手遅れではないと信じながら、着実に進んでいくべきなのではないでしょうか。

熊倉　私も、これまで百二十年の歴史のなかで芸術家を輩出してきた芸大だからこそ、まさに二十一世紀の新たな現場を創出することができるのだと思います。一方で、現実にはそのような小さなローカルの、目の前の社会の人々に向き合おうとする芸術家が必ずしも多くないということは、現場にいて非常に残念なことなんです。企画を立案するときにも、もっと芸術家のほうからアイディアが出たほうが、芸術家ではない人間がプログラムを組み立てるより面白いんですよ。

　また、芸術家を輩出してきた芸大が文化政策に関われることも大きな意味があると思います。理屈や調査だけではなくて、芸術的実践から文化振興を考えるこ

畑 瞬一郎
（はた・しゅんいちろう）
教授――大学院音楽研究科音楽文化学（応用音楽学）
1963年愛知県生まれ。87年東京大学文学部言語学科卒業、89年同文学部伊語伊文学科卒業、94年同大学院人文科学研究科伊語伊文学専攻修了（文学博士）。94年東京芸術大学音楽学部講師、98年同助教授を経て、2005年4月から現職。20004年4月から東京芸術大学音楽学部副学部長、言語音声トレーニングセンター長。

とは非常に重要なのではないでしょうか。芸大がひとつの核となり、市民と行政が一緒になって、足立ならではの文化的アクションを考えていくきっかけになってほしいと思うのです。

畑　たしかに地域との連携ということでは、一方の側からだけの思いこみで動いていては、たとえそれが善意のものであっても必ずしも成功へと導くことはできませんね。例えば福祉施設での音楽療法といった活動も考えられるでしょうが、場合によっては、もっとくだけた形で高齢者施設に音楽を届けに行くということがあってもいいかもしれません。コンサートを企画するにしても、その地域ですでに行われている文化事業と相乗効果を生むような形で行えるのが理想でしょう。あらゆる活動において「受け手」というものを明確に意識して動くことが大切であり、そのような形をとりながら地域住民の方たちに納得して喜んでもらえる事業を展開していかなければならないと思います。

幸いなことに芸大には豊富な人的リソースがあります。考えようによっては、人材を提供する、あるいは時間を提供するというのが、芸大音楽学部のいちばん大切なテーマだと言ってよいのかもしれません。音楽は時間芸術ですから時間を提供する、時間を提供するための人を提供するということですからね。本当の意味でビビッドに芸術を経験するというのは、人と人とが同じ時間を共有するということと同義です。そのことを理解している音楽家は、学生を含めて、けっして少なくないのではないかと思っています。

熊倉 純子
（くまくら・すみこ）
助教授――音楽学部音楽環境創造科
1958年愛知県生まれ。82年慶應義塾大学文学部文学科仏文学専攻卒業、84年同文学部哲学科美学美術史学専攻卒業、91年同大学院文学研究科哲学専攻美学・美術史学修士課程修了。（社）企業メセナ協議会勤務を経て、2002年4月から現職。

生きた音楽体験のために

佐野　芸大生というと、みんながヨーロッパへ留学して、クラシックの演奏家になろうと思っていると想像しがちですが、今の学生たちは自分の方向性についても、音楽そのものについても興味・関心が多様なんです。そのなかで、地域社会とかかわっていろいろなことを実現しようと思っている学生や演奏家はたくさんいます。ただ、そういう人たちが望んでも、それを実現できる場が少なかったと思います。そのあたりをわれわれが、こんなのがありますよとうまく広報し、潜在的には関わりたいと思っている学生の意識を引き出す必要があるのではないでしょうか。

大角　近代の芸術家は制度化した、閉鎖的なシステムの中に閉じ込められ、社会との生きた交流がなくなってしまったようなところがあって、それは芸術家の側にある、音楽ホール、劇場、美術館といった非日常の場として作り上げられた環境に登場しないと自分は芸術をやっていることにはならないんだ、という思い込みにもつながっています。だけど本来、それだけが芸術のあり方ではないと思うんです。

ドイツ南西部のテュービンゲンという人口七万人の小さな大学町に住んでいたことがあるのですけれども、たいへん文化的な町であるにもかかわらず、そこにはちゃんとした音楽ホールがひとつもないんです。ドイツでは夜八時頃から演奏会がありまして、職場から帰って家で一息つき、近くの教会や公民館のような場所で音楽を聴いて戻ってくるわけです。そういう場では、音響はよくないし、演奏も超一流というわけではないですけれども、日常生活のなかでの生きた音楽の体験があって、感動する経験が生活のなかにあるんですよね。

ヨーロッパを理想化するつもりはないですけれども、いわば浴衣姿で風呂上がりに行ける、そういう気軽な音楽との出会いの場はもっと必要ですね。われわれの側も意識改革していくような、一種の起爆剤的なものになればいいかなと思っているんですけれども。

熊倉　従来の芸術家、あるいは芸術家観みたいなものの本質をもういちど確かめながらも、なくなってもらっては困ると私は思っているのです。ただ自分の能力を発揮できる場が、すぐれた音楽ホールだとか、コンクールで賞を取ることだけではないはずなのです。千住キャンパスを、若い芸術家の卵たちが、日常的に、フランクかつ真剣な論議をするような場にしたいと思っています。

畑　ここでさまざまに指摘された問題は今後の音楽学部の歩みを方向づけていく大きな課題だと言えますね。学生を見ていても、いわゆる伝統的な音楽学部のイメージを超えようとする学生が日増しに多くなっているように感じます。そういう意味で、あくまでも表面的・象徴的な分類ですが、伝統的な楽理科と先端的な音楽環境創造科という二つの学科を卒業した後に、学生たちが相互にクロスしあう土壌は、すでにでき始めていると言えるでしょう。現実にはダイナミックな相互作用はすでに始まっていて、それをさらに大きな動きにしていくことが、千住キャンパスに求められていると思います。

新たに誕生した千住キャンパスが、これからの音楽学部にとって、広義の研究教育環境の充実という意味できわめて大きな意味を持っていることはまちがいありません。

千住キャンパスの概要

亀川　徹

千住キャンパスは、足立区からの大学誘致を受けて、旧千寿小学校跡地（足立区千住一丁目二十五番一号）に東京芸術大学音楽学部の分校を設置する形でオープンします。旧千寿小学校校舎の土台、柱、梁といった既存の構造をすべて生かしながら再利用するスーパーリフォームという画期的な工法で建てられた研究教育棟に加え、大学の名に恥じない本格的な音楽音響研究を行うためのスタジオ関連新棟を備えたキャンパスとなります。上野、取手、横浜に続いて芸大の四つ目のキャンパスとして、コンパクトでありながら充実した施設となっています。

一昨年の五月に足立区との話し合いが始まり、その後、施設の計画や建物の設計を半年あまりで仕上げるという苛酷な挑戦に協力してくれたすべての関係者のみなさんの気持ちが、美しく結実した建物だといって過言ではありません。

キャンパスの周辺には、さまざまな文化施設もそろっており、そのような環境を生かしながら千住キャンパスの機能を十全に発揮させていけば、千住の街に文化芸術の新しい動きを生み出していくことができるでしょう。

＊

教育研究組織として千住キャンパスに設置されるのは、まず第一に音楽学部の「音楽環境創造科」ということになります。二十一世紀の新たな音楽芸術と、それにふさわしい音楽環境・文化環境の発展と創造に資する人材育成をめざす音楽環境創造科は、平成十四年の当初から茨城県の取手キャンパスにて活動を行ってきましたが、新設から四年を経て、ようやく充実した自前の施設を手に入れたことになります。当然、学生や教員の期待は大きく膨らんでいます。また、千住キャンパスでは大学院の研究活動も活発に行われる予定になっています。この四月には大学院音楽研究科の修士課程に「音楽文化学」という専攻が新設されました。これは音楽という営為を広い視野から研究するための組織で、音楽学、音楽教育、ソルフェージュ、応用音楽学、音楽文芸、音楽音響創造、芸術環境創造といった七つの研究分野から構成されています。この「音楽文化学」専攻に属する教員が、上野キャンパスと千住キャンパスを往き来し、伝統と革新を横断しつつ高度な研究活動を進めていきます。

※平成二十年には大学院博士後期課程「音楽文化学専攻」も開設される予定となっています。

◆スタジオA、スタジオB、録音調整室

新館の三階に位置する床面積約一六〇㎡

スタジオA。新館3階にある大規模な録音スタジオ

スタジオB。中規模スタジオ（新館3階）

第7ホール外観

の大規模な録音スタジオ（スタジオA）と約五〇㎡の中規模スタジオ（スタジオB）、そしてそれらの間に位置する録音制作スタジオは、千住キャンパスの中心ともいえる施設で、マルチチャンネルステレオ（5・1サラウンドが代表的）などの新しい録音再生手法の研究に用います。計画当初、地下鉄千代田線がキャンパス敷地の地下を走っていることが判明したため、地下鉄からの振動がスタジオ内に伝わらないように、柱や梁の配置やコンクリート壁の厚さなどの建物そのものの仕様から浮き床構造といった音響に関する仕様まで、防音には細心の注意をはらって設計されました。また、従来のホールなどの設計で考慮されている残響時間などの値だけではなく、録音を目的とした部屋としてふさわしい条件を十分検討し、反射音の到来方向や音の密度までを考慮に入れた音響設計を行うことで、非常に優れた音響特性を備えたスタジオが実現しました。録音調整室には、5・1サラウンドのモニタースピーカーシステム、32チャンネルのミキシングコンソール、録音や編集作業を行うデジタルオーディオワークステーション、そのほかさまざまな効果機器などを備えており、これらを駆使することでさまざまな録音手法の研究、作品制作が行われることが期待されます。

またスタジオAでは、一五〇席程度の観客を収容することも可能で、室内楽などのコンサートをはじめ、学生のさまざまな創作活動や研究の発信の場としても活用されることでしょう。

◆音響制作スタジオ

新館一階の音響制作スタジオは、デジタルオーディオワークステーションを中心としたシステムと、プロジェクタによる映像の再生環境も備えており、映像を伴う音楽音響作品の制作を行うことができます。また最先端オーディオのさまざまなフォーマットに対応した視聴室としての機能を備え、講義や作品の視聴会などに用いるほか、国際音響規格にのっとった音響特性を備えていることで、音響心理に関するさまざまな実験にも活用します。

また隣接する音楽演習室をはじめ、第7ホール、スタジオA、B、そして録音調整室といった室間の連絡回線を備えており、これらの部屋を結んだ録音作業や作品制作、さまざまな実験も行うことができます。

◆行動室・観察室

新館二階に位置する行動室・観察室は、おもに音楽療法セッションに用いられます。行動室に隣接した観察室から行動室にいる被験者の様子をマジックミラーごしに観察できるだけでなく、ビデオ映像や各種音源を使った実験なども行えます。

◆第7ホール（ダンス演劇スタジオ）

従来の体育館を改修し、キャットウォーク（天井裏の通路）や、照明、音響の調整機器を備えたコントロールギャラリーを設けることで、さまざまなイベントに対応できる多目的スペースとして生まれ変わりました。音楽と身体表現に関する研究をはじめ、さまざまな活動に用いることが期待されます。

（かめかわ・とおる／音楽学部音楽環境創造科助教授）

録音調整室。録音手法の研究、作品制作がおこなわれる

第7ホール（ダンス演劇スタジオ）

行動室。隣接する観察室とともに音楽療法セッションに用いられる

中庭

音響制作スタジオ。映像を伴う音楽音響作品の制作をおこなうことができる

◆組織の説明

音楽環境創造科：二十一世紀の新たな音楽芸術と、それにふさわしい音楽環境・文化環境の発展と創造に資する人材育成をめざす学科。平成十四年に新設され、現在まで茨城県取手キャンパスにて活動を行ってきた。

音楽文化学：音楽を中心とした多様な芸術活動を人間の重要かつ本質的な文化的営為としてとらえ、広い視野と多彩な研究方法によって探求するための専攻として、平成十八年四月に大学院に新設された。七つの研究分野から構成されているが、そのうち音楽音響創造（音楽と音響の知識、技術を身につけた上で、それらを横断する先進的な研究テーマに取り組む）と芸術環境創造（音楽、舞台芸術、映像、メディア表現など、さまざまな芸術表現と社会の結びつきを多角的に研究する）の二つの研究分野は、この四月に新設されたもの。

キャンパス開設記念イベント情報

千住キャンパスを拠点として展開される活動や事業について

東京芸術大学音楽学部は、足立区の全面的なサポートを受けながら、平成十八年九月からさまざまな芸術文化事業を展開する。千住キャンパスは、その東京芸術大学という機関の教育研究の現場であると同時に、千住の街や足立区に芸術文化を振興するための、いわば大学が社会にむけて積極的に働きかけていくための活動拠点となる。足立区の「文化芸術振興基本条例」に謳われた基本理念に沿うような形で計画される多様な事業は、大別すると芸術文化発信事業、教育福祉事業、区民文化事業、学術事業などに分類することができる。ここでは予定されている事業の中から主だったものを選び、その内容あるいは理念を簡単に紹介する。

（本文中すべて敬称略）

芸術文化発信事業

音楽学部の教育研究成果を広く社会に発信し、質の高い芸術を聴衆に届けていく活動であり、多様な演奏会が用意されている。その第一回目を飾るのが、芸大フィルハーモニーによる演奏会（九月十二日、天空劇場〔東京芸術センター〕、指揮:松尾葉子、サックス:須川展也、ほか）である。その後、芸大チェンバーオーケストラ演奏会（九月十八日、天空劇場、指揮:ゲルハルト・ボッセ）、学生オーケストラ演奏会（十月十五日、奏楽堂、指揮:ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー）、邦楽ガラコンサート（十月二十一日、西新井文化ホール、司会葛西聖司、ほか）と続く。また、松原勝也カルテットと著名なジャズピアニスト山下洋輔の競演（十月九日、天空劇場）や、歌舞伎役者市川染五郎を迎えての舞台企画（十月二十九日、西新井文化ホール）など、趣向をこらした企画も予定されている。

また、千住キャンパスを教育研究活動の本拠地とする音楽環境創造科にスポットをあてた企画もある。とりわけ今年度に客員教授として来日しているアーティスト、インゴ・ギュンターが千住キャンパスを会場として作品を発表する予定である。

この秋、千住の街がアートの発信地として国内外から注目を集めることとなるだろう。

教育福祉事業

質の高い音楽や芸術を提供する一方で、それに劣らず音楽学部が重視しているのは、子どもからお年寄りまでの区民を対象に、それぞれのレベルで音楽を感じ、音楽を楽しみ、音楽に親しんでもらうための活動である。今年度は、音楽教育研究室が中心となり足立区の小中学校と連携して、音楽の授業やブラスバンドなどの課外授業において、学校現場のニーズに合わせた指導協力を行うことになっており、これを広い意味におけるアウトリーチ活動の一環と位置づけ、継続的な活動に発展させていくべく計画を立てている。

また、いわゆる福祉の分野でも、高齢者施設や障害者施設にて音楽活動・音楽療法を行ったり、実際に障害児などを千住キャンパスに招いて音楽療法を実践することも予定されている。

これらの活動に加えて、大学の教育リソースを活用したエクステンション・プログラム（いわゆる公開講座）も計画されている。

区民文化事業

芸大のイニシアチブで行う事業ばかりでなく、すでに地元で行われている芸術文化活動に参加することで、区民のイニシアチブで始まった文化事業をさらに充実させるためのお手伝いをすることも忘れてはならない大切な活動である。もともと足立区は音楽がきわめて盛んであり、足立シティーオーケストラ、足立区民合唱団、足立ジュニア吹奏楽団などをはじめとするさまざまな団体が活発な芸術文化活動を展開している。このような区民レベルの活動を大切に育てていくことが、芸術文化振興の基本であることを意識しながら、与えられた環境に最適な具体的方策を組み立てつつある。

学術事業

千住キャンパスは学問を究める場所でもある。とはいえそれは、閉鎖的な壁の中で学者中心の共同体が研究をしていれば十分だということではない。東京芸術大学が、音楽、芸術、文化を研究の対象としている以上、その考察は社会の現実、そして音楽家や聴衆の具体的な姿を想定しつつ行わなければならないし、研究の成果は社会に、そして社会に生きる人々（区民）に還元していかなければならない。この意味で、千住キャンパスにおける学術活動の一環として、いくつかの学術シンポジウムの開催が予定されている。文化庁長官・河合隼雄らを迎えた文化政策シンポジウム（十月二十日・二十一日、千住キャンパス）をはじめ、映画音楽に関するシンポジウム、音響をテーマとしたシンポジウムなど、学術分野での充実したイベントも開催される予定である。

※これらの事業については、音楽学部千住キャンパスに設置される「アートリエゾンセンター」☎〇五〇五五二五二七四四」が問い合わせ窓口となっている。

千住散策

かつては日光街道の宿場町として栄え、現在も下町らしい賑わいをみせる
「千住」の町を歩いてみる。

千住キャンパスがある東京都足立区の「千住」は、江戸時代に日光街道の宿場町として発展した。

文禄3年（1594）に最初の千住大橋が架けられた後、慶長２年(1597)には馬継場の指定を受け、徳川三代将軍家光の寛永２年(1625)に、日光街道初宿の指定を受けた。

東海道品川宿、中山道板橋宿、甲州街道内藤新宿と並んで「江戸四宿」のひとつに数えられた千住宿は、水戸道・佐倉道の初宿でもあり、奥州諸大名の参勤交代をはじめとして、日光参詣や商用の旅人はもちろん、江戸から手軽に遊びに来る人々で大いに賑わった。船頭唄「千住節」は、その繁栄の様子を今に伝えている。

また、千住は松尾芭蕉が『奥の細道』に旅立った地としてしても知られ、千住大橋北詰には「奥の細道　矢立初の碑」がある。

明治以後は、水利を活かした造船や煉瓦産業が栄え、とくに火力発電所の「お化け煙突」は、足立のシンボル的存在だった。

現在は北千住駅を中心に、駅ビルや丸井のような新しいゾーンと、古くからの商店街が拮抗しながら繁華な商業地域を形成しているが、その一方で、旧道沿いには「やっちゃ場（青物市場）跡」「本陣跡碑」「横山家住宅」など、歴史を偲ばせるスポットが散在しており、江戸と現代がつねに交錯する、刺激的な下町となっている。

①JR、京成、東京メトロが乗り入れる北千住駅
②駅前にある「飲み屋横丁（ときわ通り）」
③ 芸術文化発信事業の舞台のひとつである東京芸術センター
④古い蔵を生かした喫茶店
⑤「宿場町通り」と名づけられた商店街
⑥かつては紙問屋だった旧家「横山家住宅」
⑦旧街道の角に建つだんご屋
⑧アトリエとして使われている古民家

①第1ホール

芸大の歩き方

ー上野の杜のキャンパスガイドー

第5回★音楽ホール

歴史ゆかしい「上野」という場所に校地を構え、明治以来の伝統を誇る芸大の隠れた「名所」を毎回テーマを変えて紹介する。

②第2ホール

⑥第6ホール

⑤第5ホール

ホールいろいろ

杉本和寛

このところ、奏楽堂で木曜日の十一時から行われる「モーニング・コンサート」が大人気である。九時には整理券を求める人たちが集まり始め、十一時前には開場を待つ人々で長蛇の列。中には常連さんたちも数多くいるようだ。綺麗なホールで、オーケストラつきの曲が無料、しかもソリストは学部生のなかの選りすぐりなのだから、正直〝お得〟過ぎるのである。

一般的に芸大の「ホール」というと、この「新奏楽堂」や、上野公園内にある「旧奏楽堂」が連想されるのだろうが、実は音楽学部の建物の中には、第1から第6まで大小さまざまなホールがつくられている。

授業や試験の演奏はもちろんのこと、本番前の練習から、学生たちのリサイタルや自主公演に至るまで、その用途もさまざまである。内容も、オペラからオーケストラ、室内楽、さらに第4ホールでは能舞台を使って種々の邦楽演奏が行われるなど、実に盛りだくさん、フル活用されている。

どのホールも、芸大の施設としてのご多分に漏れず、決して立派な設備をもっているわけではなく、いわばただの《はこ》のようなものである。でも箱は箱でも開けてびっくり《玉手箱》！ ここからは偉大な才能が次々と飛び出している。

そんな箱の中を、芸祭や博士リサイタルのときに、機会があったら覗いてみてください。大きなホールでは味わ

④第4ホール

③第3ホール

えない、演奏者との距離の近さと迫力、そして次代のマエストロたちの躍動感に触れることができますよ。
（すぎもと・かずひろ／音楽学部助教授　音楽文芸研究室）

上野の杜の波瀾万丈

第三回

美校の経営戦略・依嘱製作事業

岡倉天心校長の経営戦略に端を発して
第二次大戦中まで続いた依嘱製作事業は
美校の実力と有用性を世に示すことになった。

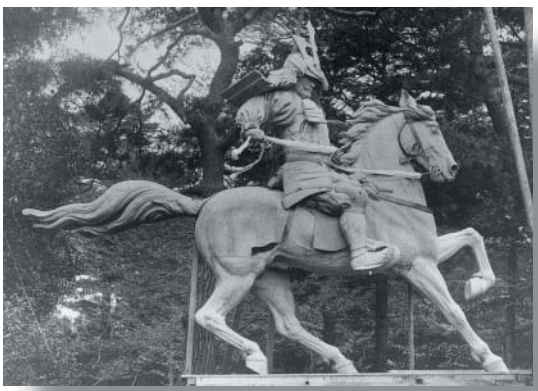
吉田千鶴子

芸大の経営が苦しいことを聞くにつけ、思い起こされるのは草創期の東京美術学校（美術学部の前身。美校）だ。遠大な理想を掲げて発足はしたが、政府から支給された予算は計上予算の十分の一以下。そのために岡倉覚三（天心）校長がとった措置は依嘱製作事業の推進であった。明治二十五（一八九二）年を例にとると、歳入約四万円（うち政府支出金二万二千円余）のなかの依嘱製作収入は一万四千五百円余で、約三六パーセントを占める。美術という特殊な分野の学校であることから、このような特別会計が容認されたのであろう。

教室で生徒に教えることのほかに実験製作によって世の模範となるような優れた製品を作り、製作過程を生徒に見学させたり手伝わせたりする必要があるというのが天心の考えであった。その実験製作費も本来は国が支給すべきだが認められない。そこで一般からの依頼を受けて製作を行なうことにしたのである。文部省に伺いも立てず、特に規則など設けずに事業を開始したらしい。何といっても第一着手が国家的記念像である楠木正成の大銅像であり、それは住友財閥の資金と飛ぶ鳥を落とす勢いの顕官九鬼隆一の斡旋による皇室献上品の製作であったから、文部省の認諾に関係なく校長の一存でことは決したようだ。

いかに名人を集めて指導組織を作ろうとも、教育成果が現れるのは十数年後のことである。常識どおりのことをしていたのでは理想の実現はもとより美術学校というものが社会に認知されるのもむずかしい。現に東京音楽学校は美校と一緒に独立した学校として設置されながら、芸術に理解のない政府によって高等師範学校の附属にされてしまった。そうしたことを避けるには奇策を弄してでも早く実績を示すに如くはない。そういう考えもあって実施したのが企画展覧会や講演会、そして依嘱製作だったと思われる。

開校後まだ一年足らずの明治二十二年十二月、住友家から楠木正成銅像の製作依頼を受けた美校では直ちに準備を始め、二十四年四月に彫刻科教授高村光雲を木型製作主任とし、新規採用の後藤貞行、山田鬼斎、石川光明に同担任を、同じく岡崎雪声に鋳造担任を命じた。後藤は馬の彫刻の専門家で、木彫を光雲に習った人。日本の木彫家、鋳造家の腕で西洋の銅像に負けない優れたものが作れることを世に示すチャンスだとばかり一同奮い立ったものの、日本ではそのような大きな騎馬銅像は前代未聞であり、しかもみな大きな彫像の経験などない。そこで校長の指揮のもと、研究に研究を重ね、学科教員も時代考証等に尽力し、鬼斎がまず木彫雛形（大学美術館に写真が残る）を製作。それを原寸大に引き伸ばし、伝統木彫の技を駆使して白木の美しい原型を完成させたのが二十六年三月。それを皇居に運搬して天皇に御覧頂き、美校に戻して一般公開したのち雪声が鋳造に着手。雪声はわざわざ渡米して分解鋳造法を学び、それと日本古来の技法を用いて二十九年九月に鋳造を完成させた。皇居前の現在地に建立されたのは岡倉校長辞職後の明治三十三年七月であったが、国の中心地に登場したこの銅像は、美校教官各人の能力が共同製作というかたちで十二分に発揮され、世の期待に沿う出来栄えのものとなった。なお、このとき作られた木型製作場はその後も転用されて長く使用され、鋳造工場も鋳造科の授業や依嘱製作に盛んに利用された。



「楠木正成銅像木型」明治26年（大学美術館所蔵写真）

楠木正成銅像に次いで着手したのは帝国博物館美術部（部長天心）の依頼による模写・模刻（五か年計画）で、横山大観ら上級の生徒が古画を模写し、竹内久一、山田鬼斎ら教官が奈良で仏像の名作を模刻して博物館に納めた。それとともに松方伯銅像、知恩院観音銅像、

シカゴ万博出品工芸品などの製作を受託し、翌二十五年には二度目の国家的記念像である上野の西郷隆盛銅像を受託。光雲、貞行、林美雲、雪声らが共同製作を行うことになり、紆余曲折を経て像姿を決定、明治三十年春に漸く木型が完成し、雪声の鋳造をへて三十一年五月に現在地に建立された。同じく二十五年にはシカゴ万博のパビリオン鳳凰殿の設計と室内装飾を受託して全校あげて取り組み、図案教育に役立て、また、博多の日蓮上人の大銅像を受託して竹内久一に担当させ、二十七年にはアメリカ人富豪の室内装飾の依頼にも応じ、その他川田男爵銅像、刀剣、花瓶、盃、置物、香炉、銅碑等々の製作を受託。三十年には博物館の庭にあるジェンナー銅像を製作し、同年公布の古社寺保存法の適用第一号として中尊寺金色堂修繕を行なうなど、活発な事業を展開した。

「国際こども図書館鏡板」帝国図書館建設に際して明治37年に製作を依頼され、津田信夫が中心となり鋳造科で製作

昭和6年5月7日、正木校長自ら背中に「漆」の字を書き印を捺した法被を着て、一同明治神宮に議事堂内漆塗り成就祈願（磯矢阿伎良旧蔵写真）

正木直彦校長時代（明治三十四年～昭和七年）にはこの事業に一層熱が入り、製品の種類も増えた。大掛かりなものでは仙台昭忠銅標、第五回内国勧業博覧会各種噴水器、浅草公園噴水器、日比谷公園噴水器・アーク電灯柱、屏風「精華」「綵観」、帝国図書館銅製鏡板、下谷凱旋門装飾、掛川戦勝観音銅像、長岡護全騎馬銅像、献上品飾り棚・書棚・衝立・花瓶・香炉・鼎・絵巻・画帖・置物・時計、東京勧業博覧会会場彫刻、大阪図書館記文銅板、仙台広瀬橋高欄、改築日本橋上部青銅製電灯柱（獅子、麒麟ほか）、中央停車場（東京駅）壁画、戦艦河内の楠公坐像、佐竹侯爵銅像、御紋付梨子地太刀掛、ホノルル鳳凰噴水塔、即位御剣、議院本館ブロンズ扉製作・館内の漆塗りなどがあり、ほかに石膏像複製、メダル、印刷物などの量産品も盛んに作られた。岡倉校長時代と異なるのは献上品製作が増加し、その多くは校外の名工たちとの共同による美術工芸品製作であることだ。価格・技術面で信用度が高かったことにより非常に多くの製作依頼があり、そのため図案だけ立てて製作は校外の業者に委ねてしまうことも多く、本来の実験製作の意味を失い、単なる請負製作となる傾向が生じた。

岡倉校長の経営戦略に端を発して第二次大戦中まで続いたこの依嘱製作は、主たるものだけでも約四六〇件に上る。この事業のお蔭で教官は研究の機会を得、生徒は実地の勉強ができ、卒業生は仕事を与えられ、そして美校の実力と有用性が世に示された。しかし、問題がなかったわけではない。岡倉校長時代にはこの事業によって美校の鋳造が隆盛に赴くにつれ、民間の鋳造業者たちが美校に需要を独占されるとして反発し、新聞紙面を賑わした。岡倉校長排斥運動の首謀者が配布した例の怪文書にも「収益を以て私を営み」云々としてこの事業が槍玉に挙げられている。名校長正木直彦もこの事業に関連して批判された。大正五年、美校当局の風紀粛正に対する生徒の反発をきっかけに、前年辞職した岩村透を中心とする美校改革運動が盛り上がって大波乱を巻き起こしたのであるが、その際に国民美術協会が美校に突きつけた改革案は「生徒の実験を主要の目的とすべき公私の依嘱製作は本来の趣旨を失して生徒見学の便乏しく、動〔やや〕もすれば単に製作請負に類したる形式に陥り依嘱の認諾、金銭の授受等に関し公私を混同せる形式ありて弊害茲に発するもの鮮〔すくな〕からず」と指弾した。また、そうした非難に対処する意味で厳格な会計検査が行なわれ、その結果、依嘱製作の経理に不当な処理が見つかり、校長は譴責、会計主任は懲戒減俸の処分を受けた。気の毒なことに、この会計主任はそれが原因で神経を病み辞職している。正木校長はそれを機に依嘱製作事業を全廃すると公言したものの、当時は御大礼関連の各種の製作が続行していた上、その後も献上品を中心とする製作依頼が続々と寄せられたため廃止はできず、結局、主要な製品は完成後必ず校内に展示して生徒や一般に見せるなどの配慮をし、事業を推進することにしたのであった。

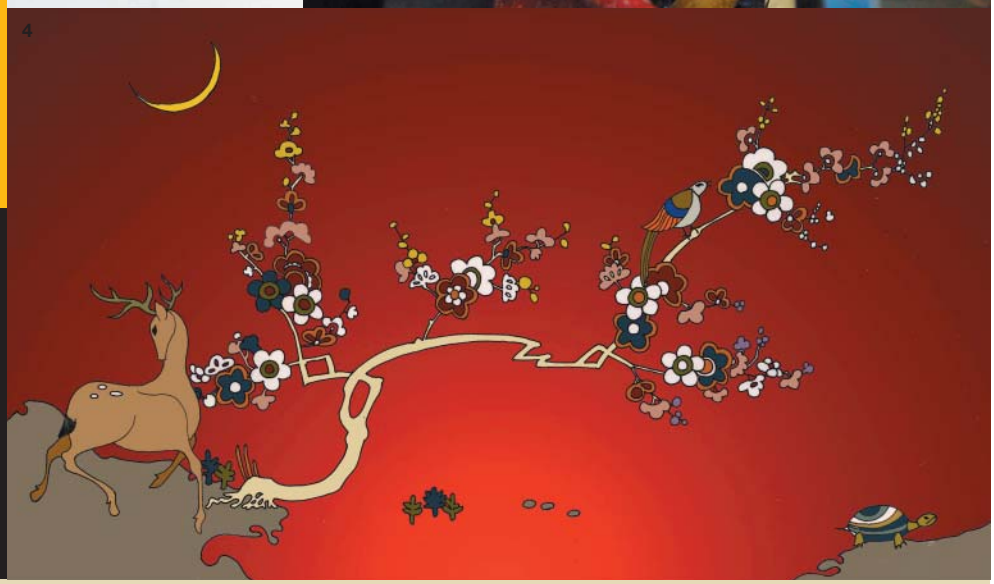
依嘱製作品のうち、銅像などは戦時中の供出で多くが失われたが、これまでの調査によると現存しているものも少なくないようだ。また、製作に関する記録文書や写真が本学に多数残されている。それらに基づいて、遠からずこの事業の全容を紹介したいと思っている。（「　」の引用文の原文送り仮名は片仮名）

（よしだ・ちづこ／学史編集担当）

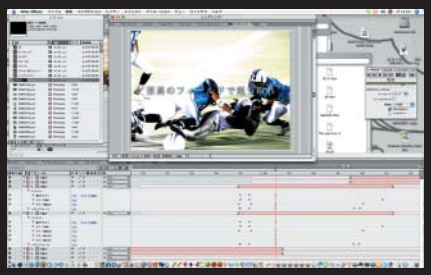
次号予告

歌劇《オルフォイス》上演

明治三十六年七月、東京音楽学校奏楽堂において歌劇《オルフォイス》が上演された。日本人による最初のオペラ上演である。再演計画もあったが、風紀問題等により中止された。それから五十三年後の昭和三十一年四月、《椿姫》上演で音楽学部にオペラが復活。平成十八年に第五十一回を迎えた「藝大オペラ定期」の第一回となる。



1　TACOROOM（青木純、恵土敦、小柳祐介、八山健二）「ホーム」
2　フレーム３
3　ボロボロパンツ
4　幻想庭園
5　久保田絵美「おでかけメェメェ」
6　映像制作



クラブ・サークル訪問

第4回

映像美術部

学外への発信も活発で受賞も多い「映像美術部」。多種多様な部員、役割分担、ものづくりへの団結力で映像というメディアを通じて今日もさまざまな人へのコミュニケーションをはかる。

反響が制作への原動力になる

蛯沢あゆみ

東京芸術大学映像美術部は、美術学部、音楽学部の学生ら総勢六十四名からなる芸大のなかでも規模の大きいクラブです。一九八〇年代に動画部として成立し、その名前と方針を変えて二〇〇三年に現在の映像美術部となりました。昨年は映像美術部員六人からなるグループが、短編クレイアニメーションで多くの賞を受賞しました。現在も映像美

部室にて

7　青木純「コタツネコ」
8　青木純「将棋アワー」
9　青木純「奈良鹿物語」

術部内で個人やグループに分かれて制作をし、クラブ全体としては情報交換の媒体的な性格となっています。

映像と一言で言っても表現方法は手描きアニメーション、クレイアニメーション、実写映像などとさまざまありますが、映像美術部は多種多様なバックグラウンドを持った人で構成されているので、あらゆるジャンルの映像制作が可能となっています。美校の学生は主に映像の画像部分を担当し、音校の学生は映像につける音を担当し、他校の学生はそのもとでサポートを担当してもらうなど、役割分担がしっかりできているのも映像美術部の特徴ではないでしょうか。近年の映像美術部の活動ではアニメーションの制作が目立ちます。アニメーションは莫大な量と緻密な作業が広範囲にわたって要求されます。コマ数だけをみても、一秒間に二十コマ以上撮影しなければいけません。それを可能にするのは、このような多種多様の部員と、役割分担、そしてものづくりへの部員間の団結力だと思います。

そのようにして制作された映像を学内でまとめて見られるのは、年に一回の藝祭での上映のみとなります。むしろ、その成果は外に向けて発信するように心がけています。私たちの作品は多くのコンペティションをはじめ、テレビを通じて一般の方々に見ていただいています。作品を上映した時に、反響が直に自分に返ってくる、それが映像の魅力の一つです。そういった反響が次の制作への原動力となるのです。

映像というメディアを通じてさまざまな人とコミュニケーションを図ればと思いつつ、今日も地道な制作に励んでいます。

（えびさわ・あゆみ／美術学部デザイン科四年）

教員は語る

第五回

―芸大への期待・抱負・提言―

佐藤雅彦 × 山下薫子

教授―大学院映像研究科（メディアデザイン）

助教授―大学院音楽研究科音楽文化学（音楽教育）

音や光の原理に立ち返る

――佐藤先生は芸大の卒業生でも、今まで教壇に立たれたこともなかったわけですが、東京芸術大学にどのような印象をお持ちだったのでしょうか。

佐藤　芸大は、努力の範囲で入ることができる東大や慶応と違って、少なからぬ「天賦の才」を与えられた人たちが集まるところで、自分とは関係がない真の意味でのエリート、選ばれた人の集団だと思いこんでいました。

まだ社会人になったばかりのころ、晴海で行われていたオーディオ・フェアの展示ブースを担当することになって「増殖する壁紙」という新しいデザインのポスターを企画したことがあるんです。自分の意図を理解してくれる人は、はたしているのだろうかと思ったときに、芸大生に藤幡（正樹）くんという人がいるので、おもしろそうだから会ってみないかと言われて会ったのが、芸大の人との最初の出会いでした。そのときに僕が先入観で持っていた芸大とは違うのだと思いましたね。

まだメディアアートという言葉は、もちろんなかったんですが、数学や物理や工学に素直に面白がる藤幡さんを見て、そこに接点を見出したのです。そこから藤幡さんの仲間である、谷口広樹さん、佐藤卓さん、その後、日比野克彦さんという芸大の人たちとも知り合いになっていきましたね。

――山下先生はこのたび開設された千住キャンパスの大学院音楽文化学専攻に関わっていかれます。ご専門の音楽教育についてまず紹介いただけますでしょうか。

山下　「音楽教育」の特徴は〝二足の草鞋〟を履いた人たちの集まりだということです。

大学院にのみ設置されている講座なので、学部の専攻で培った専門性を生かしながら音楽教育を見ていこうということになります。同期には、長唄三味線の人や声楽の人などがいて、それぞれの専門的立場から意見を戦わせることができ、興味が広がりました。最近では、楽理科出身の人たちを中心に、すぐれた研究方法を身につけて入学してくる人が多いように感じます。

私の場合、入学当時はピアノ指導についての研究をしようと思っていましたので、学校教育という限定された場での音楽教育だけではなく、プライベート・レッスンをも含めた、より広い視野から教育を見てみたいなと思っていました。

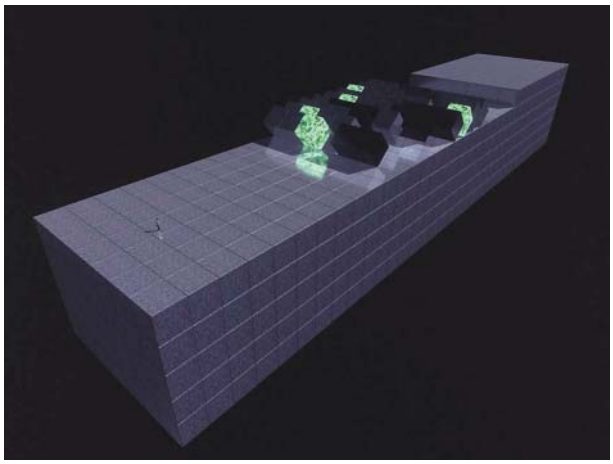
――佐藤先生も新しくできた新港校舎のメディア映像に教授として着任されました。

佐藤　僕は、メディア映像専攻のなかでもメディアデザインを担当しています。藤幡さんがメディアアートを担当しているのですが、今は専攻の枠を越えて四人の教員全員で学生全員を教育しているという状況です。

いくつか自分なりのカリキュラムを組んで学生を指導しているのですけれども、最近、ひとつの課題として「原理（principle）」というテーマを取り上げました。いろいろな科学技術を用いると、それなりに新しそう

に飾ったり、にぎやかに音楽をつくったりはすぐできるのです。でもよく見ると、単にLEDのつけ方を知っているとか、音の鳴らし方を知っていただけではないか。やはり物事の原理である「音が何なのか」「光が何なのか」ということを知らないと、ものの新しい関係性を生むことができない。

みんな手はすごく達者で、整えることがすごく得意なんですよね。でもそれでは器用なだけで新しいものを生み出すことはできないのではないか。そこで「原理」に戻って考えましょうということですね。



"I.Q" (Intelligent Qube)
©Sony Computer Entertainment

山下　音楽教育の本質はまさにそういうところにあるのだと思います。合唱や合奏など、ある型を学び吸収していくというベクトルが大切である一方で、音そのもの、あるいは音を通して感じられるリズムそのものに向かっていくというベクトルも必要だと、つい先日のゼミで議論したばかりです。とくに、幼い頃からピアノやヴァイオリンを習ってきた人には、無意識のうちに身についてしまった西洋音楽の型というものがありますので、それを解きほぐし、原点に返ってみるというプロセスがとても大事だ、と今お話をうかがっていて思いました。

幼い頃からの積み重ねというのは怖いもので、学生時代は、楽器の練習が食事をとることと同じように当たり前になっていました。だから「音楽が好きですか?」と改めて問われると「食事をとることが好きですか?」と聞かれるのと同じような違和感を覚えたのですね。「音楽する自分」を対象化して見ることの難しさは、こうした感覚によるのではないか思います。

「わかる」ということの本質

――佐藤先生は映像の表現者として音楽についてどのように考えていますか。

佐藤　僕は、音が世界を支配する、音が映像の世界観を決定すると思っているんです。ですから僕がつくる表現は全部といっていいほど音からつくります。

音は時間ですから、音を管理すれば時間を管理できるんですね。僕がつくる映像は機能的なものが多いので、時間も決められていることがほとんどです。ですからそれを制御するのに音を使います。音楽が持っている力は要素還元できないですし、人をどうしてそんな気持ちにさせるのかとか、今もって解明できないんですが……。

僕は、表現というものに興味を持つ前に、もともと教育というものに非常に関心があって、それは教室というメディアでだけでなくて、DVDやCD-ROMや、テレビやインターネット、携帯というメディアでもいい。あるいは新聞や本のような紙のメディアでも、そういう何かある媒介を通してだれかとコミュニケーションをとり、こちらの意図を伝えるということにすごく興味がありました。そのときに初めて表現という必要性が生まれたのです。そして、音に対する関心も同時に生まれました。

テレビCMの十五秒という与えられたメディアでも、何で最初にこの音が来ると、皆が一秒ぐらいでこっちを向くのだろうというようなことにすごく興味があったんです。ある音を出すと、お茶の間やリビングがそこの画面に釘づけになる。そこを支配するのは全部音なんですよ。

普通の人はテレビを見ることにおいては、お茶の間のプロと呼んでいいほど日々、習熟しているので、形骸化した表現を好むわけではなくて、新しいものを見分けたり、聴き分けたりする力が実は、ある。だから

佐藤雅彦（さとう・まさひこ）
教授――大学院映像研究科（メディアデザイン）
一九五四年生まれ。東京大学教育学部卒業。電通のクリエイティブ局を経て、九四年独立。九九年から慶応義塾大学環境情報学部教授。二〇〇六年四月から現職。九一年クリエーター・オブ・ザ・イヤー賞、九〇年ADC最高賞、九八年文化庁メディア芸術優秀賞　〇六年　スロバキア・ドナウ賞、プリ・ジュネス賞、日本賞、受賞。

イギリス・シェフィールドでのチャリティリサイタル

そこではすごく戦わなくてはいけなかった。自分で新しいものを出さないと見てくれない、聴いてくれない。そういうことで表現技術、表現方法が必要になったんです。ですから僕は教育というところから表現方法を必要としたんですね。

山下　佐藤先生の作品には、「わかる」ということの本質について考えさせられるものがとても多いように感じます。私は、「音楽がわかる」ということの意味を教育的にとらえ、それを論文の形に表そうと努力しているわけですけれども、そんなに言葉を尽くさなくても、先生の作品のように簡潔に表現する方法もあるのだなあと感心させられました。

それから視点が入れ替わるおもしろさ。先生のホームページにある「意地悪か省エネか」の二コマ漫画は実にユニークだと思います。吊り電球が、卓上電気に向かって「両方がついていると無駄だから消してやる」と意地悪を言って手（ひも）を伸ばすのですが、伸ばしすぎたために自分の方がカチッと消えてしまうというものです。視点が変わることによって想像していたことと違うことが起きる、そのおもしろさは、音楽学習の意味を考える上でも、大きなヒントを与えてくれます。

佐藤　音楽というのはその魅力を要素還元するのは難しいと思います。広告の音を作る場合でも、同じような難しさを感じたことがあります。

「スコーン」というスナック菓子があったんですが、そのCMで「スコーンスコーン湖池屋スコーン、スコーンスコーン湖池屋スコーン、スコーンスコーン湖池屋スコーン、カリッとさくっとおいしいスコーン、カリッとさくっとおいしいスコーン、スコーンスコーン湖池屋スコーン」という十五秒の音を企画したんです。正確に言うと十三・五秒なんですけれども。

そして、音楽制作の現場で作曲の人に「スコーンスコーン湖池屋……」と口ずさんだのです。すると「それは譜面に落とせない」、「譜面に落とせないからこれは音としてありえない」と言ったのです。でも実際、僕の口から出ている。でも「それはない音だ」「でもあるではないですか」ということで、しょうがないから役者さんに、口移しで伝えたのです。それはいまだに不思議で、譜面というものに落として理解してもらうことのできないものがあるんだなあと思ったんですね。

新しい関係性を提示する

佐藤　山下先生が「食事をとるように普通のことだ」というニュアンスのことをおっしゃいましたが、実は、僕はそれがすごく尊い、そして有り難きことだと思っているんです。僕が尊敬して、付き合っている音楽家もみんな、理屈ではなくて音楽が体から溢れている人ばかりです。僕のつくりたいのはいつも「この音がどうしても必要」というものなので、「自分はなぜ音楽をやるんだろうと悩んでいる人」では打ち合わせになりづらいんですね。

いっぽうで新港校舎では「アートとは何か」というのが毎日追求されています。僕はアートというのは新しい関係性を世の中に提示することだと思っているんです。新しい科学技術によってそれを提示することがメディアアートだということをいつも追求し自分にも課しています。ですから科学技術とあまり分離できない。たとえば世の中にコンパス（磁石）がなかったときに、この針はいつも一定方向になると、だれかにそれを初めて見せられたときに僕は打ちのめされるのだと思うんです。それが僕にとってはアートなのです。

このあいだ「原理」の授業でやったことなのですが、音は振動数と振幅と波長で決まりますよね。声なんかも空気の縦波だということを話したんです。そうしたらひとりの女の子が「先生のレーザーポインターを貸してください。ちょっとつくりたいものがある」と言って、レーザーポインターで糸電話をつくったんです。糸は張らずに紙コップの底にアルミ箔のような鏡を貼って、そこに「アーーー」と声をあてると、レーザーが反射して壁に波動が映るんです。

こんどはその糸を張っていない糸電話の三〇メートルほど先に太陽電池のセルを置くんです。そして、反射したレーザー光がちょうどそのセルに当たるようにして、それをスピーカーにつないでみると、たとえば僕が「〇〇さん聞こえますか」と小さな声で話すと、大きな音で「〇〇さん聞こえますか」となったんですよ。要するに、コップの底の振動が光の反射で太陽電池のセルに振動数が伝わって、電圧が変化したんです。それを「光糸電話」と言ったのですけれども。原理に忠実だとこんなことができる。新しい関係性をちゃんと示しているかどうか、それがアートの定義なんですね。

――山下先生は芸大の前に総合大学でも音楽教育を教えてこられました。芸大とはまた違う環境で感じとられたことがあったのではないでしょうか。

山下　前任校では、さまざまな専攻の学生を対象に授

業していたこともあって、音楽を私と同じようにとらえている人ばかりではないという問題に直面しました。そして、「音楽とは何か」という根本問題を多面的に語れるように勉強し直す必要が生じました。

たとえば、さきほどCM音楽のお話がでましたけれども、言葉も音楽と同じようにリズムをもっているし、抑揚をもっています。この点を活かすことによって、音符に苦手意識をもっている人からも、生き生きとしたリズムの表現を引き出すことができました。

また、現在の学校教育では「ダンス」が体育の一領域に位置づいているのですが、「音楽とともに動く」ことは、音楽の本質を体で感じとる上で欠くことのできない重要な活動なんですね。

そのほか、理科に興味をもっている人ならば、音そのものの原理に立ち返ってみるということも可能でしょう。たとえば簡単な楽器をつくって発音原理を探ってみたり、振動数と音の高さの関係を調べてみたりするのです。

このように音楽をさまざまな方法で提示するという技術は、音楽教育を専攻しなければ身につかなかっただろうと思っています。

視点を変えて捉えなおす

――両先生ともに着任してまだ数ヶ月ですが、芸大で教壇に立たれた感想と、今後なさりたいということがありましたら最後にお聞かせください。

佐藤　この前「新しさの蒐集」という課題を出したんです。それはまだ世の中に言語化されていない、体系化されていない新しいおもしろさ、美しさで、自分だけが引っかかっているものがあるんじゃないかと思うんです。それを言語化して発表しなさいという課題でした。そういうことを毎日やっている。だから毎日開拓なんです。何が出てくるかわからない、それがすごくおもしろいですね。

藤幡さんが開講のときに生徒を集めて「芸大は来年百二十年を迎える。でもこの新しい芸大は今一年目で、伝統も新しさも両方があるところだ」とおっしゃったんです。百二十年目でしかも一年目。それをすごく表わしていると思います。だから学生も新しい伝統をつくるという心構えでいますね。

山下　芸大で勉強している人たちは、その多くが「表現のプロになるんだ」という意識をもっていると思います。毎日、何時間もかけて表現技能を磨いているわけですから、当然ですね。しかし、その一方で「鑑賞のプロ」としての自分も磨いていってほしいというのが、私の願いです。これは、先ほども申し上げた「視点を変えること」の大切さによるものです。

数年前、イギリスのシェフィールドという田舎町に住んでいたとき、チャリティでリサイタルをさせていただく機会を得ました。主催者側の尽力で、とんとん拍子に話が進んだのですが、いざプログラムを決定する段になると、これがなかなかまとまらないのです。私が演奏したい曲目のリストを送ったところ、「聴き手のことをもっと考えて」と再考を求められたからです。チャリティというのは、同じ志をもった人たちが集まってきて、自分のできる限りのことをするところだから、演奏する側も聴く側も、互いのことをよく知らなければいけないということなのですね。

考えてみれば当たり前のことだったのですが、当時の私にとっては目からうろこの感がありました。そして、音楽教育研究に携わるものとして恥ずかしいと思いました。「相手の側に視点を移して考えること」は、教育の原点でもあるからです。

大学でのレッスンや授業で教わる内容は、決して表現技能にかかわるものだけではないはずです。アナリーゼにしても、ソルフェージュやスコア・リーディングにしても、楽譜から音楽を読み取り、頭の中で響かせる技能を習得するためのものですから。そもそも、演奏というのは、高度な技能をともなう積極的な鑑賞活動なのだと言うこともできるわけですね。

この考え方をもう一歩押し進めて、聴き手の側に視点を移して自分の表現をとらえなおすことはできないだろうかということです。そうすることで、音楽する自分の姿がよく見えてきます。そして、「自分は、音楽表現のプロである前に、鑑賞のプロなんだ」と感じられるようになったとき、その人はすでに、音楽教育者としての第一歩を踏み出していると考えられます。そんな真の教育者が芸大から一人でも多く輩出することを願って、日々、教育・研究活動に携わってゆきたいと思っています。

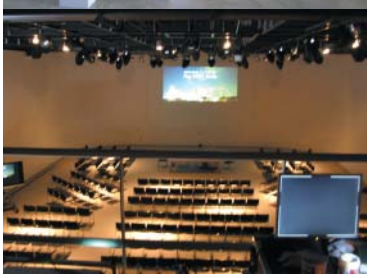
山下薫子（やました・かおるこ）
助教授――大学院音楽研究科音楽文化学（音楽教育）
東京芸術大学音楽学部器楽科（ピアノ専攻）卒業、同大学院音楽研究科（研究領域：音楽教育）修士課程修了、同博士後期課程満期退学。静岡大学教育学部講師、同助教授を経て、二〇〇六年四月から現職。二〇〇〇年五月から五ヶ月間、英国シェフィールド大学研究員。主な論文は「リトミックは音楽の知覚をどのように変えるのか」（『リトミック研究の現在』）、"A Case Study on the Formative Process of Musical Imagery"（*APSMER* 2005）など。

NEWS
2006.3~2006.8

東京芸術大学映像研究科新港校舎がオープン

平成十八年四月、東京芸術大学は、映像研究科メディア映像専攻設置に伴い、横浜市みなとみらい21地区新港埠頭に新港校舎を開設し、横浜キャンパスを拡充した。

新港校舎は、横浜市が客船ターミナルを改装し、本学が借り受けたもので、鉄骨平屋建て延べ床面積約二五〇〇㎡、敷地面積は約六四〇〇㎡。メディア映像専攻の研究室やギャラリー、映画専攻の撮影スタジオなどがある。



交流

◆大学間国際交流協定締結

三月七日、東京芸術大学長と大邱大学校（韓国）総長は、芸術に関する交流及び教育研究協力を行うことに合意し、芸術国際交流協定を締結した。

調印式には、大邱大学校から李龍斗総長ほか八名、本学から宮田亮平学長ほか六名が参加した。

今回の調印により本学における交流協定締結校は十三カ国（地域）三十大学等となった。

◆外国人留学生懇談会を開催

五月十八日、大学会館内学生食堂において、留学生と学長、副学長をはじめとする関係教職員、チューターとの交流と相互理解を深めることを目的とした懇談会を開催した。

◆上海市代表団が来学

六月十二日、上海市代表団一行（Mr. Gong Xucping上海市人民代表大会常務委員会主任ほか八名、在日中国大使館員二名）が本学を表敬訪問し、宮田学長、渡邊健二理事らと懇談した。懇談後、学長が奏楽堂など学内施設を案内した。

運営

◆卒業式で新たなパフォーマンス

三月二十四日、宮田学長になってから初めての卒業式が執り行われた。厳粛ななかにも華やかさが漂う例年どおりの式次が進み、学長式辞の段になると突然照明が消えた。場内がざわめいた後、スポットライトの先に大きな筆を持ち作務衣を纏った学長が突如登場、特別に設けられた壇上へと上ると、一転大歓声に包まれる中、古代中国の金文に表れた「愛」という一文字を揮毫した。式辞では、金文の「愛」と今日の「旅立ち」が一致していると述べ、多くの卒業生から心に残る式であったとの感想が寄せられた。

http://www.geidai.ac.jp/（大学案内～学長挨拶～過去の学長挨拶～平成十七年度卒業式学長式辞）

◆日本国際賞授賞式で学生オケが記念演奏

四月二十日、天皇皇后両陛下をお迎えし、千代田区の国立劇場で行われた「2006年日本国際賞」の授賞式で、本学の学生オーケストラ（指揮・小林研一郎教授、式典序曲指揮・三河正典講師）が式典演奏、記念演奏を行った。式典招待者入場時には、音楽学部邦楽科の演奏が行われた。式典の第一部では式典序曲が、第二部では受賞者の希望曲が演奏された。いずれも総勢百名程のオーケストラによる熱のこもった若さ溢れる演奏で、後日、皇后陛下からお褒めの言葉をいただいたことが大学に伝えられた。

◆東京芸術大学ウェブサイトリニューアルオープン

本学では平成十七年度から、より使いやすく、より充実した情報の提供が可能なウェブサイトへリニューアルするための検討・製作作業を行い、六月一日オープンした。http://www.geidai.ac.jp/

◆ルーヴル美術館展開催

六月十七日から八月二十日まで、大学美術館において「ルーヴル美術館展―古代ギリシア芸術・神々の遺産―」が開催された。

ルーヴル美術館の所蔵する〈古代ギリシア・エトルリア・ローマ美術〉部門から古代ギリシア芸術に焦点を絞り、《アルルのヴィーナス》、《ボルゲーゼのアレス》などの大型彫刻作品を含む、一三四点もの古代ギリシア芸術で構成されるかつて例を見ない展覧会となった。

開幕前日の六月十六日、一般公開に先立ち、開会式・内覧会・レセプションが大学美術館にて開催された。開会式には、高円宮久子妃殿下のご臨席のほか、在日フランス大使館クリストフ・プノ公使、駐日ギリシャ大使館イオアニス・ヴァヴァス大使らを迎え執り行われた。

◆「藝大とあそぼう」子どもたちとの交流

七月二日、「藝大とあそぼう」〈マザー・グースVS桃太郎〉が奏楽堂において開催された。開かれた大学として、大学と子どもたちと

五月には、昨春新設された映像研究科映画専攻の二年生がセットを組み、クレーンも使用しての撮影実習が行われた。

七月二十八日には、新港校舎開所式、シンポジウムなどが、新港校舎スタジオにおいて執り行われた。宮田学長と中田横浜市長の挨拶ののち、引き続き、「映像創造都市と産官学連携」をテーマに、（パネラー）杉山恒太郎（株）電通常務執行役員（映像研究科特別教授）、中田宏横浜市長、藤幡正樹映像研究科長、（モデレータ）桂英史映像研究科助教授によりシンポジウムが開催された。電通、横浜市、芸大それぞれの視点から今後の産官学連携プロジェクトの目指す方向性について意見交換が行われた。

なお、本学と（株）電通は、昨年（平成十七年）十二月、わが国の映像分野における高度な人材育成及び開発研究の一層の展開を図るため、産学共同の教育・研究プログラムの開発と運営についての連携・協力に関する協定を締結している。

の交流の場を持つことにより子どもたちに音楽文化への興味を高めるとともに、「藝大」を身近に感じてもらいたいとして、台東区教育委員会の協力を得て、二年前に「藝大とあそぼう」は始まった。〈ゆかいな動物園〉〈オーケストラの逆襲〉に続き、今回が三回目。今年は、唱歌、クラシックのほか、邦楽器の伴奏による「桃太郎」など視点を変え、工夫されたプログラムが組まれた。

また、チラシ・ポスターの制作にあたり、台東区内の小学五年生（現六年生）から日本昔ばなしをテーマに絵を募集し、田原小学校の三木優君の作品がチラシの原画として採用された。全応募作品は、コンサート当日のロビーに展示した。

本企画に対し、北区からも要請を受け、今年秋（十一月二十三日）には「藝大とあそぼうin北とぴあ」が開催される。

◆森鴎外訳オペラ、本学初のDVD化

平成十七年九月に開催した、森鴎外翻訳、グルック作曲のオペラ〈オルフェオとエウリディーチェ〉全三幕「オルフェウス」は、上演後、観客のみならず、関係各方面からも賞賛の声が寄せられた。当初、出演者等に配布する目的で制作したDVDを再構成し、教育研究成果を広く社会に普及することとし、出演者らの協力を得て、この度、大学から初めてのDVDを発売した。詳しくは、藝大アートプラザ（☎〇五〇-五五二五-二一〇二）まで。

◆藝大フレンズ加入者状況

加入者数（平成十八年七月三十一日現在）

賛助フレンズ　個人一五八名
　　法人五団体

特別賛助フレンズ　個人一六名
　　法人一団体

◆今年度上半期に開催された主な展覧会、演奏会記録

大学美術館

ドイツ・表現主義の彫刻家・エルンスト・バルラハ展

会期　四月十二日～
　　五月二十八日
入場者数　約三万七〇〇人

「芸大コレクション展：大正・昭和前期の美術」展

会期　四月十二日～
　　五月二十八日
入場者数　約二万四二〇〇人

奏楽堂

藝大21　和楽の美　邦楽総合アンサンブル「今昔物語」

開催日　五月十六日
入場者数七三九人

藝大21　時の響き　ジャズ＝藝大～宮間利之とニューハードVSマント・ヴィーヴォ

開催日　七月十五日
入場者数九四五人

第13号刊行にあたって

地域社会との連携を重視し、音楽芸術の新しく多様な形態を追求することが、新たに創設された音楽学部音楽環境創造科の教育研究目標とのこと。千住という江戸気質、下町人情が残る地域でのスタートは、日本の音楽文化にとって意義があり、かつ多くの関係者に注目されることになろう。さらに、音楽学部と美術学部の共同研究も千住キャンパスにてこれまで以上に活発になる感もあり、その辺も今後大いに期待したいところだ。

「教員は語る」のコーナーで、あのピタゴラスイッチで有名な佐藤雅彦先生（新任メディア映像教授）が、「～音が世界を支配する、音が世界観を決定すると思っているんです。～ですから僕が作る表現は全部音からつくります」と語っていたのもとても印象に残った。

藝大通信編集長
長濱雅彦

展覧会・演奏会の最新情報は、東京芸術大学ウェブサイト（http://www.geidai.ac.jp）をご覧ください。

展覧会についてのお問い合わせ
東京芸術大学大学美術館　Tel 050-5525-2200
NTTハローダイヤル　Tel 050-5777-8600

演奏会についてのお問い合わせ
東京芸術大学大学音楽学部演奏企画室　Tel 050-5525-2300

演奏会チケットの取り扱い
東京芸大大学美術館ミュージアムショップ　Tel 03-5685-1176
チケットぴあ　Tel 0570-02-0990
東京文化会館チケットサービス　Tel 03-5815-5452

藝大アートプラザのご案内
（株）藝大BiOn（ビオン）
Tel. 050-5525-2102　Fax 050-5525-2486

東京芸術大学広報誌 藝大通信 no.13 SEPTEMBER 2006 編集発行 東京芸術大学藝大通信編集部